
何も決まっていない

とび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何も決まっていない

【Nコード】

N4670C

【作者名】

とび

【あらすじ】

本棚から出てきた新一宛ての手紙。それは10年前、新一が『江戸川コナン』と名乗っていた頃に書かれたものだった。（新一×蘭ではありません）

その手紙は十年間そこで眠っていた。

この日、新一がそれを見つけたのは、まったくの偶然だった。書斎で仕事をしていて、本棚から古い資料を取ったら落ちてきたのだ。

『 新一へ 』

可愛いらしい小花模様の封筒に書かれた、自分の名前。

裏には『毛利蘭』と名前が記されていたが、それを見なくても、懐かしいその字体から差出人はすぐに分かった。

差出人の名前の横に、日付が消印のように添えられている。それは十年前の、自分が『江戸川コナン』だった頃の日付だ。

当時の事が、ぼんやりと断片的に浮かんできた。

今はもう遠いそれらを懐かしく思いながら、新一は手紙の封を切った。

『 新一へ 』

新一がいつこの手紙を読むか分からないけど、でも何となく、手紙を書きたい気分だから書いてみました。

メールとか電話とかじゃなくて、手紙。

取り留めない内容になるかも……だけど、それも手紙だからって

コトで許してね。』

手紙の出だしを書き、蘭はペンを置いた。

まだ数行しか書かれていない便箋を眺め、ここから何を書こうかと思案する。

本当に、ただ勢いだけでペンを取ったのだ。だから、書く事はまだ決まっていない。

『今日引き出しを整理したら、新婚時代にお母さんがお父さんに書いた手紙を見つけたの。』

ラブレターではなかったよ（そうだと思ったんだけど残念！）。

私が生まれる前、研修で何週間か家を空けたお父さんへの手紙だった。

内容だって普通。お父さんがいない間の事が書かれてるだけ。まるで日記みたいに。

でも、その文から「寂しい」っていうお母さんの気持ちが滲み出た。

ならば電話すればいいのに……って思った。でも、研修所の宿舎に急用でもないのに電話なんてできないし、あの頃はまだ携帯はなかったし。

だから手紙を書いたんだね。』

雨が屋根を叩く音が聞こえ、新一は顔を上げた。

予報通りの天気だが、午前中から買い物に出ている妻と娘が気になる。

妻は傘を持って行っただろうかと思掛けの状況を思い起こし、そして自分がそれを持たせたのだと思い出した。それに何か不都合があれば、携帯に電話なりメールなり入るだろう。

立ち上がりかけた腰を椅子に戻し、新一は手紙に目をやった。

『でも、手紙っていいね。

文字の一つ一つに書いた人を感じる事ができるし、小さな便箋の中に、その時の想いが残ってる。

だから、他愛ない内容のあの手紙が「何かいいなあ……」って思ったのかな。

そんなワケで、急に手紙が書きたくなったの。

今私が思ってる事を綴っておきたくて……』

ペンを握る手が汗ばんでいた。

多分、自分は恥ずかしい事を書こうとしている。

だけど、きつと自分はそれを書きたくてペンを取ったのだと、蘭は今、理解した。

何かに残したいのだ。

いつか新一が帰ってきたら、すぐにそれを伝えようと思っているけれど、本当に伝えられるかは分からない。

もしも……なんて考えたくはない。

でも、母が昔書いた手紙の中の両親と一緒に暮らしているが、今は別居している。

つまり、決まっている未来など無いのだ。

『私は、新一が好きです。

気付いたのは一年くらい前なんだけど、でもきつと、ずっと前から好きだったんだと思う。

ホント可笑しいね。いつも一緒だったから分からなかったの。

新一が好きだって気付いた時はビックリしたけど、でも妙に納得した。自分の中でモヤモヤしてたものがスッキリした感じ。

だから今は、とても寂しい。

そして、会えない日が一日増せばその分新一への恋しさも増して、私は新一がもっと好きになってしまう……。

会いたい。早く帰ってきてほしい。……なのに、探偵をしている新一が一番好きだから、事件をほり出して帰ってきてなんて、言いたくない。

寂しいなんて言ってられないね。

私はもっと強くならなきゃ。今も何処かで頑張っている新一に負けないように。

新一とずっと一緒にいたいから、私も変わろうと思う。

』

玄関で音がした。妻と娘が帰ってきたらしい。

「あなたの言う通り、傘を持って行って正解だったわ」

書斎に顔を覗かせた妻に「おかえり」と言うと、新一の手元に目を留めた彼女は「依頼？」と少し首を傾げた。

探偵の仕事を依頼する手紙にしては便箋の柄が華やかだし、そもそも手紙での依頼は今時珍しい——妻のそんな疑問を察知した新一は「依頼じゃないさ」と返した。

「ただの手紙だ。……古い友人からの」

妻は別段それにこだわらなかつた。『ただの手紙』なのだ。

「今お茶の用意するから、少し休憩したら？　ずっと仕事してたんでしょう？」

「ああ。コレを読んだら行くよ……理沙」

理沙。それが、妻の名前だ。

こんな現在^{いま}が来る事を、この手紙が書かれた『あの頃』は考えてもいなかった。

蘭はずっと自分の隣にいるものと思っていたし、そんな約束だつて交わしたのだ。江戸川コナンから工藤新一に戻り、蘭と再会したその時に。

しかし、離れていた時間は二人の想いを募らせてただけでなく、二人でいた頃とは違う価値観をも生んでいた。

それに気付いたのは付き合ってから一年と少し、互いに違和感を感じ始めた頃で……。

つまりこの現在^{いま}は、他でもない新一と蘭が二人で出した答えなのだ。

リビングの方から、お茶の準備をする妻と娘の楽しげな声が聞こえてくる。

新一は手紙の残り数行を読み、書斎を後にした。

「今、すごくドキドキしてる。でも、いつか必ず伝えようと思ってる事だから、これを読んでる新一はもう知ってた事かもしれないね。もしかしたら、今の新一にとってこの手紙は好ましい内容じゃないかもしれない。その場合は、お願いします。この手紙は今すぐ破り捨ててください。」

じゃあ、長くなったから、そろそろ終わりにしようかな。

やっぱり、まとまりのない手紙になっちゃったね……ゴメン。

それでは……

蘭
」

手紙が入った封筒を携えて、蘭は新一の家の書斎にいた。

いつ来てもここの本の量には圧倒される。誰もいないこの家の静寂も相まって、ちょっとした図書館のようだ。

蘭はぐると本棚を見てまわり、中のものが動いた形跡のない棚の前で足を止めた。

新一がいつ、この手紙を読むかは分からない。

読まないかもしれない。それでも構わない。

でも、明日読むかもしれない。明日帰ってくるかもしれない。

「先のコトは何も決まっていらないもの……」

『 新一へ 』

そう宛名が書かれた封筒を、蘭はそつと本棚へと差し入れた。

（後書き）

ごめんなさい！！！！

お礼より先にまず謝りたいです。こんな才子ですみません……（震）

しかしあの、私は新蘭は大好きです。将来は幸せな家庭を築いて欲しいと思ってます

じゃあ何でこんな話書いたかと言うと、「思いついちゃったから」としか言えません！妄想は無限大です！

こんな言い訳まで読んで下さって有難うございます。これからも妄想が飛ぶ事があるかもしれませんが、どうか石とか投げずに温かく見守って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670c/>

何も決まっていない

2011年1月13日18時16分発行